

1 研究主題

「社会を見つめ、問い続ける児童生徒の育成」
～主体的・対話的で深い学びを目指した授業展開の工夫～

2 はじめに

新学習指導要領における社会科の基本的な考え方として、「主権者として、持続可能な社会づくりに向かう社会参画意識の涵養やよりよい社会の実現を視野に課題を主体的に解決しようとする態度の育成」が示されている。小牧市社会科教育研究会（以下、「本研究会」と称する）では、この考え方を、児童生徒が社会的な見方や考え方を働かせて社会的事象の特色や意味などの概念に関する知識を獲得することだけでなく、実社会で起きている出来事に目を向け、社会に見られる課題を把握してその解決策を実践しようと考えたり、よりよい社会を形成していこうとしたりする態度まで育成することを求めている、と捉えた。そこで、本研究会では、平成30年度から「社会を見つめ、問い続ける児童生徒の育成」という研究主題を設け、児童生徒が社会的な見方・考え方を身につけて社会的事象を捉えて追究するだけでなく、実社会にも目を向けて自分と社会との関わり方を問い続けながら、学びを深めていくことができるような社会科授業の実践に取り組んでいる。本年度は、3年間の研究をまとめ、愛知県社会科教育研究大会において紙面上で発表した。

3 研究のねらい

（1） 目指す子ども像

自己と社会との関わり方を考え、主権者として社会のあり方や自分の生き方を考えることができる児童生徒

（2） 研究の仮説

社会的事象を身近に感じ、深く思考して社会と向き合うことができれば、社会のあり方や自分の生き方を考えることができるようになるだろう

(3) 研究の方法

手立て① 社会と自分とのつながりを意識できる教材の活用

児童生徒の意識が社会につながるためには、身近で自分とのつながりを感じることができる教材を活用することが必要である。そうすることで、児童生徒が社会的事象を自分のこととして受け止め、興味関心や切実感などをもって自分で問いを見いだし、問題解決の見通しをもって調べたり考えたりするなど、主体的に社会的事象を追究することができる考える。

手立て② 深い学びに迫ることができる発問づくり

発問を工夫することによって、社会的な見方や考え方を働かせながら、社会的事象の追究を促す。また、その過程で少人数での話し合いや全体での意見交流など、他者との対話的な活動を取り入れ、多くの資料や多様な考えに触れさせる。このような活動を通して、児童生徒が新たな考えを構築することができ、深い学びに迫ることができる考える。

「深い学び」…習得・活用・探究という学びの過程の中で、社会的な見方・考え方を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精選して自らの考えを形成したり、問題を見い出して解決策を考えたりすることに向かう学び。

※中央教育審議会答申（平成 28 年 12 月）より引用

手立て③ 自分と社会との関係に向き合い、行動化につながる振り返り

学習内容を整理して振り返ることで学びの理解度を自覚でき、学習内容が定着する。また、振り返ることが次への学習へ向かう意欲となる。そして、獲得した知識や技能を活用して自分と社会の関係に向き合うことで、自分の考えをもったり、行動を見直したり、さらに、多くの人が共感できるよりよい社会のあり方を考えたりすることができる考える。

4 研究の過程

- (1) 令和 2 年 6 月と 7 月の 2 回、愛知県社会科教育研究大会に向けて小委員で原稿の検討を行い、10 月に紙面上で発表した。
- (2) 令和 2 年 4 月～令和 3 年 2 月の期間中に、各会員が研究主題に基づいて設定した「目指す子ども像」の実現に迫るための 3 つの手立てに沿った授業実践を実施し、授業の内容と成果・課題をまとめたデータをウェブ上で共有した。

5 研究発表の概要

(1) 単元名 小学5年「情報産業とわたしたちの暮らし」

(2) 単元の指導計画（7時間完了）

※本文中における下線部は、下記の手立てのいずれかを示す。

_____手立て① 社会と自分とのつながりを意識できる教材の活用

=====手立て② 深い学びに迫ることができる発問づくり

-----手立て③ 自分と社会との関係に向き合い、行動化につながる振り返り

時	学習課題	学習過程
1	一つの新聞記事を見て、人の思いや苦労、社会に与える影響を予想する。	・日常生活と情報の密接な関わりを実感する。 ・単元を貫く課題「情報の適切な取り扱い方を考える」をつかむ。
2	様々なメディアの特徴を調べる。	・様々なメディアの得意、不得意を見比べる。 ・<u>情報の速度、正確性、拡散性の三要素の中で自分にとって大切だと思うものは何か考える。</u>
3	テレビ番組やニュースなどの情報を発信する側の様子を調べる。	・教科書、資料集を使って、情報が自分たちのもとの来るまでにどのような過程で届くのかを調べる。 ・テレビ番組作りに携わる人々の工夫や努力を知る。
4	情報を発信する側の工夫を知る。	・視聴率なども意識しつつ、視聴者が必要としている情報を伝えることに気付く。
5	新聞記者の方の話を聞いて、新聞記事を書く苦労や思いを実感する。	・<u>新聞記者が記事を書く際に気を付けていることを知る。</u> ・インタビューゲームを体験し、インタビューすることの難しさを実感する。
6	情報の適切な受け取り方を考える。	・<u>ネットニュースと新聞記事を比較する。</u> ・<u>私たちは情報を受け取る側であることを理解する。</u> ・<u>情報を適切に受け取り、考え、行動することの大切さを理解できる。</u>
7	今後、自分たちが情報を発信できる力を得た時に意識することを考える。 インターネットの可能性を考え、情報活用宣言を作る。	・<u>自分たちがフェイクニュースを発信しないために意識することを考える。</u> ・<u>個人の発信により世界が動いた例などから適切な発信の仕方を考え、情報活用宣言を作る。</u>

6 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

ア 手立て①

児童にとって身近になりつつある SNS を教材にした。現代社会においては、児童にとって身近であり、切実感をもてる教材であった。

イ 手立て②

発問を工夫するという視点では、児童にまず聞くことを徹底させ、一つの問題でも多面的・多角的な見方をすることで、新たな考えを再構築することの大切さを伝えた。その他にも話し合いが停滞している時や、考え方が一方的で偏りがあると感じた際には、児童の考えをゆさぶる発問をすることで多面的な見方に気付かせ、深い学びに迫ることができた。

ウ 手立て③

他者の考えを聴いて考えたことや思ったことを書くこと、授業を受けて自分だったらどのような行動をとるかという二つの視点をもってふり返りを書くように指導してきた。単元を通して、少しずつだが、学習した内容を自分事として捉えて行動しようという意思が感じられるような、行動化につながるふり返りを書けるまでに変容した。

(2) 今後の課題

資料を読み取ることから湧き出てくる疑問を利用した発問や、児童の考えをゆさぶる発問をすることで深い学びに迫り、多くの児童は多面的・多角的な視点を持ち、深い理解につながるきっかけとなりえたが、一部の児童にとっては、理解しにくかったように感じた。小牧市が進めている「学び合う学び」を有効に取り入れるとともに、一部の児童が抱く素朴な疑問を取り上げながら、スモールステップを踏んで学びを少しずつ深めていくことが必要だと感じた。また、行動化へとつながるふり返りを書くためには、児童が身近に感じる教材を活用すること、そして、児童自身が教材を通して見つけた課題に切実感をもつことが大切だと感じた。常に授業の中で、自分だったらどうするかという視点をもつように呼びかけながら、他者の新たな考えに触れさせ、行動したいと思えるような授業づくりが大切だと感じた。さらに、実生活でもそのような様子を見られるとよかった。学習後に、実際に行動できる機会を与えることも一つの方法だと考える。

7 おわりに

本研究を通して、自分と社会との関わり方を考え、主権者として社会のあり方や自分の生き方を考えることができる児童生徒の育成には、上述した課題を踏まえ、単元を見通した授業実践を継続していくことが必要だと感じた。今後も実社会に目を向け、自分と社会の関係を問い続けながら学びを深めていけるような児童生徒の育成につながる授業実践を積み重ねていきたい。